

国宝「鳥獣戯画」（高山寺）の謎

東京大学大学院人文社会系研究科
増記 隆介

1、はじめに

「鳥獣戯画」を所蔵しているのは、紅葉で有名な京都・高雄の神護寺の近くにある高山寺というお寺です。山の中であり、近くには清滝川が流れているため風水害を受けやすく、古い伽藍はあまり残っていません。高山寺を開いたのは、平安時代末から鎌倉時代にかけて活躍した明恵上人です。昨年大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にも登場した文覚という僧に師事しましたが、文覚が神護寺を再興する時に梅ノ尾の土地をもらい、高山寺を作りました。明恵に関して有名なのは、自分の夢をずっと記録した『夢記』です。文化庁長官をされた心理学者の河合隼雄さんが早くから注目されていました。また、白洲正子さんなどを通じて、明恵は高潔なイメージや、夢を記録していたというユニークな業績が広められたこともあり、「高山寺・明恵・鳥獣戯画」は人気のある組み合わせとなったと言えるでしょう。

京都に行くと、お土産物として鳥獣戯画の兎や蛙をあしらったグッズがたくさん出ています。みなさんの「鳥獣戯画」に対するイメージはこうしたものかと思いますが、正式な名称が「鳥獣人物戯画」となっているように、動物だけでなく人物も描かれています。全部で4つの巻物から成っていて、それぞれ「甲巻」「乙巻」「丙巻」「丁巻」と名付けられています。一番有名なのは甲巻で、兎や蛙が人間のように相撲を取ったり、鹿に乗ったりしています。乙巻も動物だけが描かれているのですが、空想上の動物も含め動物を動物として描いています。丙巻の前半は人間を描いているのですが、後半は猿や蛙といった動物が人間のように振舞っている姿を描いており、前半と後半で内容が違うということがポイントです。丁巻は人間だけが出てくる巻で、線の感じなど異質な雰囲気のある作品です。



甲巻



乙巻



丙巻



丁巻

①～④鳥獣人物戯画

2、「鳥獣戯画」をめぐる2つの謎

🐰「詞」がないことが謎の最大の理由

「鳥獣戯画」には2つの大きな謎があります。1つは何を描いたものなのかということ。単に兎や蛙を描いただけの絵なのか、それとも何か隠された主題のようなものがあるのか、あるいは何のために描いたのかといったことがよく分かっていません。もう1つは、いつ、だれが描いたのか、あるいは誰が描かせたものなのかという謎ですが、今日は主にこの2番目の話をします。というのも、1番目は説がいくらでも出てくるのですが、答えがなく謎のままなのです。対して2番目は、私が様々な情報から考えてこんなことではないかなという話ができるのです。

「鳥獣戯画」の謎の最大の原因は、「詞（ことば）」がないことで、このことが何を描いているのか分からないことの最大の理由となっています。そして「詞」はどこかで失われたのではなく、最初からなかったものとされています。通常こうした絵巻物には、「源氏物語絵巻」（徳川美術館・五島美術館）にも「伴大納言絵巻」（出光美術館）にも絵の内容を語る文章（詞書）がついています。「病草紙」（九州国立博物館）は、顔に小さな痣がある女性を描いたものですが、女性がどのような境遇で、何を考え、どのような心理状態なのかなどがちゃんと詞書が記されています。

3、第1の謎に対する様々な説

🐰謎解きを競い合う多くの研究者たち

「何を描いたものなのか？」については明治以来、様々な説が取り沙汰されました。「鳥獣戯画」には「詞」がないので研究の結論が出ないのですが、作品があまりにも優れているので、多くの研究者が競い合うように研究を重ねました。諸説には①「六道観」を反映したもの②「法華経」と関わるもの③年中行事と関わるもの④社会に対する風刺、皮肉⑤御霊信仰と関わるもの⑥仏伝と関わるもの——などがありますが、新たに有力な資料が出てこない限り、どれが正解かは今のところ分かりません。



⑤唐招提寺落書き

兎や蛙などが出てくる絵は古い時代からありました。写真⑤は奈良・唐招提寺の梵天立像の台座に書かれている落書きで、平安時代初期のものです。多分これを作った人たちが、休憩時間などに手すさびで面白い絵を描いたのでしょう。この絵の中に、「鳥獣戯画」にもある兎が鹿に乗っている絵があります。「鳥獣戯画」に関する研究について記した書籍はたくさん出ていますが、いずれも「答えがない答え」が載っているだけで、正解が何かということは分かっていません。

4、「鳥獣戯画」について分かっていること

1) 制作時期

🐰4巻それぞれ違う時期に描かれた

とはいえ分かっていることもかなりあります。まず制作時期については、4巻それぞれ違う時期とされています。動物を描いた甲巻と乙巻は平安時代後期の1150年代以降で、丙巻は鎌倉時代初期の1200年の前後。丁巻は鎌倉時代前期の13世紀前半に描かれたと考えられています。ただ、初めから4巻1セットとして描かれたのか、それともバラバラにあったのを集めたのか、あるいは「丙」や「丁」が描かれた時に「甲」や「乙」を参考にしたのかなどについてはよく分かっていません。

2) 錯簡と欠失

🐰描かれた当初のままの姿ではない

絵巻物というのは、決まった長さの紙を糊で貼って作っているのですが、長年経つと貼った部分の接着力が落ちてバラバラになることがあります。しばらくたってから貼り直すと、順番を間違ってしまうこともあり、それを錯簡（さっかん）言います。剥がれてしまったものをなくしてしまう（欠失）こともあります。なので、いまある「鳥獣戯画」は描かれた当初のままの姿ではないのです。

3) 絵師

🐰 後半は非常に上手、前半は着ぐるみ？

甲巻の前半（第10紙まで）と、後半（第11紙から第23紙まで）を描いた絵師が異なると考えられています。これは東京大学の秋山光和先生（1918～2009）が描線を非常に細かく観察して結論を出されたもので、この説は正しいのではないかとされています。また、動物だけを描いた乙巻の絵師は、甲巻後半の絵師と同一とみられています。図⑥の右は甲巻前半、左は後半の兎ですが、後半の兎の手、肩甲骨、脚などを見ると、筆数はかなり少ないものの、それぞれの形を的確に描いており非常に上手です。片や前半の兎はちょっと頼りない感じで、「人間が着ぐるみを着ているようだ」と評した人もいました。



4) 甲巻の当初の姿

例えば、巻かれたままの巻物にお茶をこぼし、巻を広げたとします。シミの大きさは中に行くほど小さくはなりますが、シミとシミとの距離が一定に縮まりながらずっと現れます。秋山先生に師事した上野憲示さん（1948～2022）という研究者は、甲巻の前半にあるシミが後半にはなくなっているのを見つけ、ある時期にこの巻は2巻に分かれていたのではないかと推測されました。上野さんの論文には微積の数式が出てきて、数学の苦手な私は読解に往生しましたが、画期的な研究だったと思います。

⑥ 鳥獣人物戯画

5) 断簡



⑦ 甲巻前半断簡 MIHO MUSEUM

欠失によって別れ、別のルートで伝わってきたものを断簡と言います。左下の2点はいずれも滋賀県のMIHO MUSEUMが持っているもので、⑦は甲巻前半、⑧は丁巻からそれぞれ別れたものです。「鳥獣戯画」には「高山寺」という5種類の赤い印が紙の継ぎ目に捺されていて、現在の「鳥獣戯画」のイメージを作っている大事な要素になっています。別れてしまったものを貼り直す際、繋がりが分かるように捺したものと思われるのですが、これらの断簡にはいずれも印が捺されていません。江戸時代初めのころに、後水尾天皇の中宮であった東福門院が「鳥獣戯画」の修理に寄進し、修理が完成した時に印を捺したと推察されており、断簡はそれ以前に剥がれて別れてしまったらしいということになります。



⑧ 丁巻断簡 MIHO MUSEUM

6) 宮廷絵師

鳥獣戯画を誰が描いたのかについては2つの説があります。1つは宮廷絵師が描いたという説。天皇に仕

え、宮中の様々な絵画の制作を担う絵描きの集団で、後の時代の土佐派とか住吉派の先祖にあたる人たちです。こういう人たちは、基本的には宮中の行事や、襖にするための山水画、花鳥画といった世俗的な絵を描き、仏教絵画は描きません。

🐰 年中行事絵巻にもそっくりの図柄が

例えば、甲巻前半の断簡に、兎が狐、猿が鹿に乗って競争している図柄があり、猿がズルをして兎の耳を引っ張っているのですが、これと同じ図柄が「年中行事絵巻」にあるのです。「年中行事絵巻」とい

うのは、後白河法皇が12世紀の終わりに宮廷絵師に描かせたもので、都で行われる様々な祭りや宮中の儀礼などが記録されています。オリジナルの絵巻は、江戸時代に御所が火事になって焼けてしまいましたが、写し（模本）が残されています。その中にある賀茂祭（葵祭）に登場する風流傘の飾り物を描いた図に、競馬で猿がズルをしているシーンがあります。



⑨乙巻（右）と年中行事絵巻（鷹司模本）

さらに、乙巻にある牛同士が角を突き合せている図柄も、「年中行事絵巻」の中にそっくりのものがあ（図⑨）、これらが宮廷絵師説の根拠となっています。

7) 絵仏師

もめている宮廷絵師説と絵仏師説

仏像を作る人を木仏師、仏画を描く人の絵仏師と言います。運慶や快慶といった仏師の名は法名、すなわちお坊さんとしての名前、運慶がどうい本名だったのかは記録に残っていません。絵仏師はお寺に所属して、仏教美術の需要を賄っていました。



絵仏師説は中野玄三先生（1924～2014）らが唱えていて、その根拠となっているのが図⑩のような例です。左は醍醐寺にある「白描十二神将図像」ですが、これに出てくる虎と、右の「鳥獣戯画」乙巻の虎の描き方が近く、左のような図を日常的に描いていた人が「鳥獣戯画」も描いたのではないかという説です。これは

⑩醍醐寺の「白描十二神将図像」（左）と乙巻

これで説得力があり、納得がいきます。宮廷絵師か、絵仏師かを巡ってはかなりもめているのですが、私はもめごとが嫌いなので、両方で描いたのではないかという説を出しています。

8) 模本

模本に出てくるへビは甲巻のオチ？

古い時代に「鳥獣戯画」を写した模写（模本）がいくつか残っています。特に室町時代から江戸時代にかけて、「鳥獣戯画」の評価が高かった時期があり、そのころに作られたと思われます。図⑪はハワイのホノルル美術館にある模本で、東京オリンピックの開会宣言をしたブランデーさんのコレクションです。これを見ると、今ある甲巻の中にはない場面がいくつかあります。兎と猿が碁を打っている場面や、最後に蛇が出てきて蛙たちが逃げ出す場面などですが、蛇が出てくる場面は、本来の甲巻の「オチ」と思われます。



9) 制作地

「鳥獣戯画」が高山寺にあるというのを記録的に遡れるのは室町時代の16世紀までで、その前にどこにあった

⑪甲巻模本 ホノルル美術館

のかは分かっていません。高山寺を創設した明恵は非常に厳格な人だったので、果たして彼が高山寺にいた時期に、このような戯画が描かれたとは考え難く、制作当初は高山寺以外の場所に存在していた可能性が高いとされています。

10) 似絵

平安時代後期から貴族を中心に「似絵（にせえ）」（似顔絵）を描くことが行われるようになり、宮中行事に出た人の似顔絵を描いて記録に残したりしました。描いたのは正式な絵師ではなく、貴族の中の似顔絵が得意な人だったようです。この似絵が特に流行るのが鎌倉時代の13世紀前半くらいですが、丁巻の中にもほかの絵と違って、図⑫のように特定の人間を描いたのではないかと思わせる表現が出てきます。それを根拠に、丁巻の制作時期は他の3巻よりかなり下って、鎌倉時代前半の終わり、13世紀の前半くらいとされているのです。



⑫丁巻の似絵風人物

5、修理から分かったこと

1) 料紙

㊦ 日常的に使われていた紙を使用

2009年から4年かけて鳥獣戯画の修理が行われ、その結果、素材について多くのことが分かりました。まず使われている紙ですが、楮（こうぞ）を原料にした紙を水にさらし、白さを増すために米粉を填料（てんりょう）として加えて漉返（すきかえ）した紙、つまり再生紙であることが分かりました。一度使った紙は字などが書かれており、繊維に戻すとグレーっぽくなるので、米粉を加えて白くしていました。紙を叩いて繊維を硬く締める「打ち紙」という加工はされていませんでした。本来、絵巻物には「打ち紙」をしたうえに雲母を塗布した紙が使われますが、鳥獣戯画に使われているのは、絵を描くために特別に用意されたものではなく、日常にお寺で使われていた紙だったということです。

2) 紙質

㊦ 甲巻前半が最良、甲巻後半が最悪

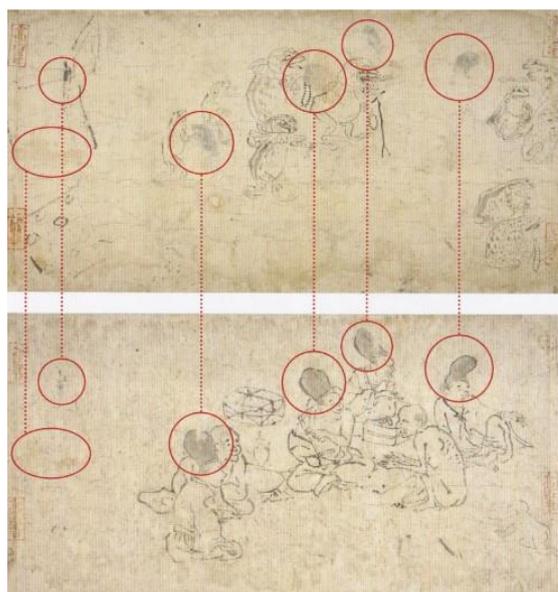
その中でも甲巻前半の紙質が最も良く、甲巻後半のそれが最も劣っていました。つまり甲巻の前半と後半で使っている紙が違うことが分かり、前にも述べたように秋山光和先生が前後半で絵描きが違うという説を唱えていたこと、さらに、ある時期に甲巻は2巻に分かれていたのではないかという上野憲示さんの説も裏付けられたこととなります。甲巻前半の第5紙の紙と、後半の第12紙の紙を比べると、後半のほうには繊維の塊りがいっぱいあるのが分かります。つまり再生紙を作る際、繊維を漉く前の処理の仕方が荒いということです。

3) 分離（あいはぎ）

㊦ くっつき残る烏帽子の痕跡

紙漉きというのは漉く作業を何回も繰り返すので、断面がミルフィーユみたいに何層にもなっており、技術があれば層の真ん中あたりから表裏2枚に分けることができます。この技法を「あいはぎ」と呼びます。丙巻にはもともと表に人物、裏に動物が描かれていたのですが、あいはぎによって分離して前後につないだことにより、今のように前半が人物、後半が動物となっていると考えられています。

この説をさらに裏付ける根拠が修理によってもたらされました（図⑬）。というのも、前半の人物がかぶっているいくつかの烏帽子と同じ配置で、後半の動物の



⑬丙巻後半（上）に残る前半（下）の痕跡

絵に烏帽子の墨の痕跡と思われる黒いシミが写っているのが分かったのです。いまの丙巻は 20 枚の紙が繋がっていますが、本来は 10 枚だったということになります。あいはぎは偽物作りにも使われていた技術で、特に水墨画のように墨をいっぱい使う絵だと、同じ絵がもう 1 枚できるわけです。江戸時代には表具屋が別の 1 枚を作って売り、収入にしていたようです。



⑭丙巻前半（右）後半（左）の紙の表面の状態の差

図⑭の右は人物を描いた丙巻前半、左は動物を描いた後半ですが、前半のほうが繊維の痛みが激しいのが分かります。も

ともとは人物が先に描かれ、のちに裏に動物の絵が描き足されました。しかしある時期から表と裏が逆転し、人物のほうが粗雑に扱われ裏側になりました。それは多分、甲巻や乙巻の動物の絵の人気が出てきたことに呼応したものと思われる。

4) 研究史と修理から見てきたこと

📄 紙質から言えば絵仏師説が有利

ここで研究史と修理から見てきたことをおさらいします。①お寺で日常的に使われている紙を使っていることからすると、宮廷絵師がそういう紙を使ったかどうかという疑問もあり、日常にお寺に入りしている絵仏師説が有利②紙質から甲巻は 2 巻構成だったことがほぼ確実③丙巻は初めに表だけ描かれ、のちに裏が描かれた④丙巻前半の人物戯画は傷みが激しく、線が薄くなってしまったため、あとの時代に墨で描き直された。従っていまの絵の線は時代判定の材料にならない。

6、第二の謎に対する仮説

1) 「鳥獣戯画」をめぐる史料

📅 1253 年の時点で丙巻が出来ていた

鳥獣戯画に「詞」はありませんが、丙巻の最後に唯一字が出てきます。鎌倉時代の建長 5 年（1253）5 月の奥書で、「秘蔵々々之絵本也 拾四枚之也 建長五年五月日竹丸（花押）」と書かれています。これにより、少なくとも 1253 年の時点で丙巻が出来上がっていたと考えられます。竹丸というのはお寺に修行に入っている出家前の若い男の子（稚児）と思われます。

次に出てくるのが室町時代の 1519 年の記録で、高山寺の経蔵にあった様々な資料の目録です。その中に「シャレ絵 三巻 箱一二入」という記録がありました。シャレ絵というのは、「洒落」つまり笑いを誘うような面白いようなものを描いた絵ということで、たぶん「鳥獣戯画」にあたると思われると考えられています。なので、3 巻というのが気になるものの、1519 年の段階で高山寺の経蔵の中に「鳥獣戯画」があったものと思われる。

🔥 高山寺焼き討ちの際、巻物を仁和寺で保管

続いては、やはり高山寺にある「華嚴宗祖師絵伝」という国宝の絵巻を昭和の初めに修理した時に、裏側に貼ってあった紙の中から出てきた文書です。元亀元年（1570）に仁和寺の「喬怡（ちょうい）」という僧侶が書いた記録で、この中に「獣物絵上中下同類巻二巻」と書かれています。つまり、獣物絵が上中下あり、それと似たようなものがさらに 2 巻あるということで、この 2 巻とは丙巻と丁巻の人物戯画だと思われます。さらにこの文書には、天文 16 年に細川晴元が高山寺を焼き討ちにした際、巻物がバラバラになってしまい仁和寺で保管しているが、いずれ高山寺が復興したら返さなければならないと書かれています。注目すべきなのは、どうもこのころに「鳥獣戯画」はバラバラになっていた可能性があるということ。その際に出て行ってしまった断簡が、個人蔵になったりしているのです。

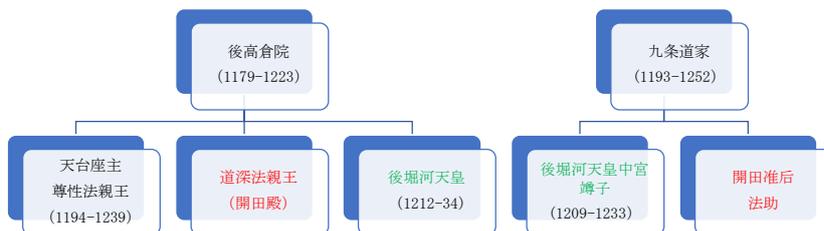
2) 二人の「開田殿」

🐦 鳥獣戯画を持っていた開田殿

もう1つ重要な点は、この文書に「鳥獣戯画」について「開田殿□□本」と書かれていることです。□□の部分、ほかの文書の例から考えて「所持」とかではないかと思われ、すなわち開田殿が持っていたことを示しているようです。

仁和寺の記録によると、開田殿と名乗った人物は2人いました。1人は仁和寺御室第九世の金剛定院御室道深、もう1人は第十世開田准后法助というお坊さんです。仁和寺では代々、天皇の皇子が出家して住職になります。そして出家する

と法親王という立場になり、仁和寺御室と呼ばれます。2人の開田殿に関する系図を見ると、両者は義理の兄弟にあたるのが分かります。



⑮ 2人の開田殿の系図

3) 巻同士の比較研究

🐼 推理小説っぽい謎解きが魅力

基礎的な研究方法ながらこれまでに意外と行われていなかったのが、巻同士が絵としてどういう関係にあるかという比較研究です。例えば、図⑩は上が甲巻、下が丁巻で、いずれも法会の場面が描かれています。



⑩ 甲巻(上)と丁巻(下)の法会場面の比較

甲巻では猿のお坊さんが蛙の仏さまにお経をあげていて、別の僧たちが周りで聴いている。下の丁巻はそれが人間になっていますが図柄は同じです。甲巻では参列した猿が泣いていますが、丁巻でも同じ格好で人間が泣いており、明らかに甲巻の図柄を意識して描いていることが分かります。

丙巻と丁巻を比較しても、同じようなことが見受けられます。図⑪はいずれも法力競(ほうりきくらべ)を描いたもの。下の丁巻は真ん中にいる蛙に変えられてしまった人を、山伏が元の人間の姿に戻そうとする場面ですが、上の丙巻にも同じような表現があります。甲巻の有名なお相撲のシーンも、丁巻の断簡に出ってきます。丙巻には首引きや耳引きの場面がありますが、甲巻後半(長尾家模本)にも首引きが出てきます(次ページ図⑫)。こういうのを美術史では図像の引用と言いますが、特に丁巻がほかの3巻を意識して描かれていることが多いようです。このような引用関係からそれぞれの成立の事情を推察する。そういうところが、美術史の研究というのはちょっと推理小説っぽくて好きなところなんです。



⑪ 丙巻(上)と丁巻(下)の法力競の比較



⑩甲巻後半（上・模本）と丁巻の首引きの比較

のコレクションを持っている。坂東にはないだろうから見せてやる」と言うと、頼朝は「私のような身分の者が、そのような高貴なものを見るのは申し訳ないので、拝見せずに帰ります」と断り、後白河が残念だったということが『古今著聞集』という鎌倉時代の記録に出てきます。

🐰 文化的権力に取り込まれるのを避けた？

このエピソードについて、頼朝は本当に興味がなかったのではないかという解釈もありましたが、いまはそうではなく、後白河が持っている絵巻コレクションを含む文化的権力の中に取り込まれるのを避けたのではないかという解釈が有力です。この時代、絵巻や絵画といったものが政治と極めて近い環境にあり、文化的な力を持っている人間が同時に政治的な力を持ち得たのです。コレクションには現在では国宝の「源氏物語絵巻」「伴大納言絵巻」や、失われてしまった「年中行事絵巻」などがあつたと思われれます。これらの絵巻は、最も腕の良い絵描きたちに、最高の紙や絵具といった画材を与えて描かせたのに対し、片や「鳥獣戯画」は日常にある再生紙を使い、高価な絵の具を使わず墨の線だけで描かれています。後白河院の絵巻コレクションの作品とはまったく相反する性格を持っているのですが、ただし絵としては抜群にうまいのです。

🐰 鳥獣戯画は豪華コレクションのパロディ？

そこで私が考えているのは、豪華なコレクションを作った後白河が、自分のコレクションに対するパロディとして、あえて粗末な素材で簡単に描けるような絵巻を作らせたのではないかということです。腕の立つ絵師たちを集め、「兎と蛙が相撲を取っているところを描いてみなさい」とか言ってその場で描かせ、それを見て「おおっ！」と驚いたりしていたのではないかとか、次々に妄想が膨らんでくるのです。別の言い方をすれば、巨大で美しい絵巻コレクションがあつたからこそ、「鳥獣戯画」のようなものが生まれてきたのではないのでしょうか。豪華な食事ばかり食べていると、たまにお茶漬けが食べたくなるように。

5) 鳥獣戯画の成立過程（増記私案）

研究史で分かったこと、修理をして分かったこと、そしてそれらに文字資料を加えて考察した結果、現時点で私が考えている「鳥獣戯画」成立の過程は以下のようなものです。

- 1、乙巻が先行する動物画（吉祥図像や宋から渡来した「二十四孝図」の図様など）に基づき成立した（宮廷絵師と絵仏師の競作）。
- 2、甲巻二が、乙巻の「戯画」として同じ絵仏師により制作された。
- 3、乙・甲二より少し良い紙を使って宮廷絵師が甲巻一を制作した。
- 4、甲巻二のイメージから宮廷絵師が人物戯画（丙巻前半）を描いた。
- 5、甲巻全体のイメージから動物戯画（丙巻後半）を描いた（絵師は不明）。
- 6、甲巻・丙巻のパロディとして丁巻（宮廷絵師か貴族）が描かれた。

それぞれの巻が制作されたであろう時期と、図像の引用の関係を照らし合わせていくと、次のような整理ができます。①甲巻前半に出てくる図様が丙巻後半の動物戯画に引用されている②甲巻後半の図様が丙巻前半、後半、丁巻で引用されている——ということになります。

4) 後白河院周辺の絵巻制作

12世紀の終わりごろ、後白河法皇は絵巻をたくさん作らせ、出来上がった作品を蓮華王院（三十三間堂）の宝蔵に収めて、巨大な絵巻コレクションとしました。源頼朝が上洛して後白河に会った際、後白河が「私は大変な絵巻

6) 丁巻制作と後堀河院

宝蔵から甲乙丙を持ち出し丁巻作らせた？

丁巻は後堀河院の周辺で描かれたのではないかというのが、いま私が考えている説で、その理由は次の3点です。①「鳥獣戯画」を持っていた開田殿は後堀河院の兄弟にあたるため、後堀河院は「鳥獣戯画」を見ていた可能性が高い②後堀河院は、後白河院の巨大な絵巻コレクションを管理する権利を持っていた③後堀河院は丁巻にも出てくる似絵を愛好していた——。思考の過程でいうと③を最初に思いました。

「丁巻をあえて似絵風に描いたのはなぜだろう」と考えた時に、後堀河は似絵を好きだったなあと考えたからです。

貝合わせの賞品として生まれた？

天福元年（1233）の春に、譲位した後堀河上皇と中宮の藻壁門院が貝合わせという遊びをしました。そして、負けたほうが勝ったほうにあげる賞品として、絵巻物を作ったということが『古今著聞集』や後堀河院の兄である尊性法親王の書状などの記録の中に出てきます。その際には、後白河院が描かせ蓮華王院宝蔵に収められていた絵巻物を持ち出し、それを参考にして新しい絵巻物を作らせたようです。私は、「鳥獣戯画」も後白河院が作らせ、初めは蓮華王院にあったと思っています。となると、後堀河が宝蔵から持ち出された



⑱後堀河院

「鳥獣戯画」の甲・乙・丙を見て、「こんなに面白いものがあるから、何か新しいものを付け加えよう」と思いつき、丁巻が作られたのではないかと思うのです。

ただ残念ながら、蓮華王院宝蔵から持ち出された絵巻の中に「鳥獣戯画」があったかどうかは分かりません。というのは、持ち出されたものの一覧は、「第六櫃」「第十二櫃」といったように、絵の名前ではなく箱の名前で記録されているのです。図15の系図を見ると分かるように、貝合わせをしたのは後堀河天皇と後の後堀河天皇中宮遵子で、後堀河の兄である道深法親王と遵子の弟・法助が開田殿を名乗っています。私は、道深法親王が「鳥獣戯画」を所有していたと考えますので、この時に後堀河は、「鳥獣戯画」をお兄さんのほうに見せて預けたのではないかと考えています。

最後に本日のお話の結論、第2の謎に関する「鳥獣戯画」の成立の過程ですが、①甲巻、乙巻については後白河上皇が描かせて蓮華王院宝蔵に置いていた②その後、図様を引用して丙巻が作られて3巻になった③それらが天福元年、後堀河院の貝合わせの時に持ち出され丁巻が付け加えられた④4巻は仁和寺にしばらくあり、開田殿が持っていた——。これが第2の謎に対する私の考え方です。何を描いたものか、内容にどういう意味があるのかという第1の謎に対する答えはいまだに分かりませんが、何のために書いたのか、すなわち制作の目的という点、後白河が一生かけて作った巨大な絵巻コレクションに対する、一種のパロディとして描かせたと考えています。

[講義録に掲載した図の出典]

- ・「特別展 国宝鳥獣戯画のすべて」図録（東京国立博物館）、2121年）＝1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 16, 17
- ・「日本の美術 300 鳥獣戯画と鳴呼絵」（至文堂、1991年）＝5
- ・「鳥獣戯画がやってきた」図録（サントリー美術館、2007年）＝11, 18
- ・「鳥獣戯画 修理から見えてきた世界」（勉誠出版、2016年）＝13, 14
- ・「別冊太陽 鳥獣戯画決定版」（平凡社、2021年）＝19

[主要参考文献]

- ・小松茂美・上野憲示『日本絵巻大成 6 鳥獣人物戯画』（中央公論社、1977年）
- ・辻惟雄『日本の美術 300 鳥獣人物戯画と鳴呼絵』（至文堂、1991年）
- ・高山寺監修『鳥獣戯画 修理から見えてきた世界』（勉誠出版、2016年）
- ・サントリー美術館『鳥獣戯画がやってきた』図録（2007年）
- ・京都国立博物館『国宝 鳥獣戯画と高山寺』図録（2014年）

- ・土屋貴裕ほか『もっと知りたい 鳥獣戯画』（東京美術、2020年）
- ・増記隆介監修『別冊太陽 鳥獣戯画決定版』（平凡社、2021年）
- ・『ユリイカ 鳥獣戯画の世界』（青土社、2021年）
- ・伊藤大輔『鳥獣戯画を読む』（名古屋大学出版会、2021年）
- ・東京国立博物館『国宝鳥獣戯画のすべて』図録（2021年）
- ・土屋貴裕ほか『鳥獣戯画研究の最前線』（東京美術、2022年）

【質疑応答】

Q 「鳥獣戯画」が高山寺にあるのはどうしてでしょうか。

A 当時は仁和寺と高山寺の関係性が非常に深く、2人の開田殿も双方を行ったり来たりしていたようです。細川晴元が高山寺を焼き討ちにした際には、「鳥獣戯画」を仁和寺に避難させていたこともありましたが、そういう関係もあってある時期に高山寺に移され、そのまま留め置かれたものと思われますが、具体的な時期などは分かっていません。

Q 高山寺の印が5種類もあるのはなぜですか。

A 室町から江戸にかけて、蔵の中の調査が何度か行われ、点検済みの確認として印が捺されました。長年にわたってそれを何度か繰り返している中で、印の数も増えていったのだと思います。

Q 「鳥獣戯画」が国宝になったのはなぜでしょうか。また動物を擬人化して描くことはその後の時代にも行われていますか。海外ではどうでしょうか。

A 国宝になったのは戦後まもなくです。ある時期には粗末な扱いをされたり、表と裏を剥がされたりしましたが、とにかく、墨の線だけで描かれた白描画の中ではかなりうまく、しかも「落書き」に源流があるような絵画がここまで完成した形で残っているのは極めて貴重です。海外にもほとんどなく、日本絵画の源流である中国の当時の作品の中にも見当たりません。なので、国民にとって類ない宝であるものという国宝の指定基準を十分満たしていると思います。

増記隆介先生のプロフィール

1974年 茨城県守谷市生
 1993年 私立開成高校卒業
 1993年 東京大学文科三類入学
 1999年 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了
 1999年 財団法人大和文華館学芸部部
 2004年 文化庁文部科学技官（絵画部門）、文化財調査官（絵画部門、古墳壁画室）
 2013年 神戸大学大学院人文学研究科准教授
 2016年 博士（文学、東京大学）
 2019年 Columbia University in the City of New York, Visiting Professor
 2021年 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現職）
 専門は仏教絵画史、趣味は謡曲・仕舞（宝生流）
 主な著書に『日本の美術 508 孔雀明王像』（至文堂、2008年）
 『院政期仏画と唐宋絵画』（中央公論美術出版、2015年）
 『天皇の美術史 1 古代国家と仏教美術』（吉川弘文館、2018年）
 『別冊太陽 鳥獣戯画決定版』（2021年）等がある。